

## 『一寸のペンの虫』

2018年03月16日

「朝日歌壇」に彗星のように現れた「ホームレス歌人」・公田耕一氏の歌は、「歌壇」を賑わせた。「親不幸通りと言へど親もなく親にもなれずただ立ち尽くす」、「パンのみで生きるにらず配給のパンのみみにて一日生きる」、「哀しきは寿町といふ地名長者町さへ隣りにはあり」という歌など、38首も掲載された。フリージャーナリストの三山喬氏は、公田氏を求めて「寿町」に入り、ノンフィクション『ホームレス歌人のいた冬』を著わした。公田氏に辿り着けなかったが、取材で出会った人々との会話から、生きることの重さを伝えていた。ノンフィクション作家は、ここまでのめり込んで書くのかと感銘を受けた。三山氏は多岐にわたるノンフィクション作品を著わしている。

昨年の12月に『一寸のペンの虫 “ブンヤ崩れ” の見たメディア危機』を上梓している。自分の半生を紹介しながら、現在のメディアの危機的な実態を報告している。三山氏は13年間、朝日新聞記者を務めている。入社した時、社長から「(朝日新聞は)権力の抑圧によって筆を曲げるよりは、筆を折る、つまり死を選ぶくらいの気概を秘めた企業だということ、諸君もハラの中に入れておいてほしい」という挨拶を受けた。記者たちは、いつでもどこでも飛び出せるように、緊張した、休みのない生活を強いられているが、権力を監視するジャーナリストとしての矜持を持っていた。それが、彼らの立ち位置であった。

2014年、朝日新聞は、「慰安婦問題」と福島原発事故に関わる「吉田調書」に誤報があったと、訂正、謝罪した。この時とばかり、凄まじい「朝日バッシング」が起こり、「国賊」「売国メディア」とまで言われた。その背景には、「慰安婦」はいなかったという主張が込められていた訳である。古舘伊知郎(テレ朝)、岸井成格(TBS)、国谷裕子(NHK)といった、権力に異議を申し立てるキャスターが降板し、高市早苗・元総務相は公平性を欠く放送法違反には「電波停止処分もあり得る」とまで言った。権力による陰に陽に見せる間接的な圧力によりメディアが萎縮する状態を招来したことは事実である。「国境なき記者団」によれば、世界180ヶ国・地域を比較した「報道の自由度ランキング」で、民主党政権下では11位だったが、安倍政権発足後に急低下、72位で、G7では最下位になった。

三山氏は、ジャーナリズムは変貌してきたが、インターネットの出現が、世界規模で言論の変質を決定づけたと言う。紙媒体の情報は一定のチェック機能が働くが、ネット社会は歯止めが利かず、不正確だったり、意図的にデマを流す。受け取る側も「信じたい情報」だけを受け取り、それを拡散する。無償で入手でき、匿名で発信できる。ヘイトスピーチを流すネトウヨの社会的弱者を痛めつける傍若無人さは腹立たしい。責任を負わない情報、主張が世界中に振り撒かれている状態になっている。

米国大統領選挙の時、ローマ教皇フランシスコはトランプを支持している、沖縄の翁長雄志県知事は沖縄を中国に植民地として売り渡すなどというデマが、私のところまで来るのであるから、啞然とする。三山氏は、「恥さらしな、ネトウヨの売国的暴走に心底、嫌悪感を抱くようになったのであった」と書いている。「一寸の虫にも五分の魂」から「一寸のペンの虫」「ブンヤ崩れ」と自任する三山氏はイデオロギーで右左に峻別するのではなく、「ファクト(事実)」を積み上げることによって、真実が見えてくると力説している。

「朝日新聞」は「森友問題」に関する文書の改ざんをスクープした。改ざんの実態が明らかになり、驚き入る。民主主義が根底から崩されるような事態である。森友問題に関する克明な資料を書き残した「役人たち」と「朝日新聞」に拍手したい。これに基づき、誰が、何のために改ざんしたかの真実を突き止め、責任を明らかにしてほしい。